

外邦図の公開にむけた課題

小林 茂

外邦図研究グループでは、大学所蔵の外邦図のデジタル化をすすめ、そのインターネットを通じた公開を推進してきた。これまでは「外邦図デジタルアーカイブ」のサーバーが置かれている東北大学の所蔵する外邦図だけであったが、2009年度には京都大学文学研究科地理学教室、お茶の水女子大学、さらに大阪大学の外邦図のうち、東北大学にないもののデジタル化を実施し、この公開を準備しているところである。また、お茶の水女子大学では、少数ではあるが、サイズの大きな多色刷りの兵要地誌図を中心にデジタル化をおこない、その公開を開始している。

こうした外邦図のデータは、地域情報として関連分野の研究者の注目を集め、最近はその分野の研究集会での発表や出版物への寄稿も求められている。外邦図がカバーする空間的広がりを反映し、大きなコンテンツをもつデータとして評価されるようになったわけである。ただし、外邦図の公開をさらに推進するには、いくつかの課題があることがはっきりしてきており、これに対する本格的取り組みが必要になっている。

その最大のもは、現在公開されている外邦図は東南アジアのものが中心で、東アジアについては、なお公開に踏み切ることができない点である。この基本的背景は、宮澤仁・村山良之・小林茂「外邦図デジタルアーカイブの公開に関する課題」(『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』2009年に収録)でくわしく示したので、ここではくりかえさないが、外邦図作成の経過と近隣諸国の地図政策が複雑に関与している。

これに関連して留意しておかねばならないのは、国立国会図書館や岐阜県図書館がおこなっている外邦図の閲覧サービスや、科学書院のような出版社がおこなっている外邦図のリプリントの販売と、インターネットを通じた公開とは、大きくちがうという点である。世界中から閲覧できる「外邦図デジタルアーカイブ」の場合、閲覧できる人は国内だけでなく海外にもひろがっており、とくに日本に対して歴史をふまえた複雑な感情をもつ近隣諸国の人びとが、これをどう受け取るかは、容易に予測できない。

台北の中央研究院が公開している「台湾新舊地圖對比」や東南アジアの戦中・戦後期の空中写真を公開するウィリアム・ハント・コレクション(Williams-Hunt Aerial Photograph Digital Collection)は、こうした課題を考えるに際し興味ぶかい。「台湾新舊地圖對比」の場合は、グーグルアースの上に貼りつけられた「台湾堡圖」(20世紀初頭の2万分の1地形図)の伸縮は自在で、同様に伸縮する現代の地図や衛星写真との対比もできて、外邦図の公開の理想を示すようなシステムである。ただしこれで見られる古地図は「台湾堡圖」にかぎられる。他方、ウィリアム・ハント・コレクションでは、タイについては大きめの写真も見られるが、それ以外の国については、小さなサムネイルおよびそれをやや拡大した画像を示しつつ、フルサイズの画像の閲覧はタイの場合もふくめて担当者に申請するようにしている。

「台湾新舊地圖對比」とウィリアム・ハント・コレクションを比較すると、詳細な画像の提供と広範な閲覧とは当面両立が容易ではないことがうかがえる。こうしたシステムの当事者が、地図情報の提供と閲覧の範囲との関係をどのように認識しているかをふくめて意見を交換し、外邦図デジタルアーカイブの公開を考えるときにさしかかっている。